

## 東北大学所蔵 Ralph Hodgson 関係資料とその周辺 (三)

大 原 理 恵

【前稿<sup>1)</sup>より続く】

### 8. 大正・昭和初期の日本古典文学翻訳をめぐる状況

東北帝国大学法文学部長を務めた石原謙は、ホジソンについて「文学に関する識見のみでなく人物としても高潔」で「学生への感化も少くなかつたことと思う」<sup>2)</sup>と回想している。ホジソンが日本にもたらしたものは、「感化」といった無形の影響が大きかったであろうと思われるが、有形のものでは日本学術振興会英訳万葉集<sup>3)</sup>があげられる。しかし、ホジソンの立場は翻訳者ではない。翻訳委員会委員長瀧精一序文(1939年12月)には次のようにある。

Haxon Isii〔石井白村〕and Shigeyoshi Obata〔小畑薫良〕, who made the tentative translations, Mr. Ralph Hodgson who revised them, and Dr. Sanki Ichikawa〔市河三喜〕who supervised all matters relating to the English.

その現場に立ち会った土居光知によればホジソンの添削は「よりよい表現を原訳者にあくまで考えさせることにつとめ、「添」には消極的であって、「削」を主としていた」<sup>4)</sup>という。本稿は日本学術振興会万葉集英訳事業に関する検討を目的とするが、まず大正から昭和初期の日本古典文学翻訳の状況について、東北大学関係者の発言や活動を通して一瞥してみることにはしたい。なお本稿は英文学・日本文学を専門としない、日本語を母語とする読者を想定している。

大正3(1914)年、八木秀次<sup>5)</sup>(1886-1976)は、東北帝国大学工学部教授着任を予定した欧州留学中、第一次大戦に遭遇しドイツからロンドンに移った。そこで後に『源氏物語』の英訳で知られることになるArthur Waley(1889-1966)の日本語研究を援助している。

タイムスに小さな広告<sup>6)</sup>を出した。(中略)「日本の一紳士は日本語を研究しつゝある人には無料で援助する意志がある」(中略)手紙には『自分は大英博物館でビニオン氏の下に東洋美術の分類をやつてゐる者である。日本文を読むことを助けて貰ひたい』とあつて漢字を十字ばかり書いてあつた。之がウオレー氏である。(中略)同君は漢文は棒読みに来て仮名交りの日本文よりも解釈し易い様子であつた。「近頃まで坪内士行君<sup>7)</sup>が居

- 1) 「東北大学所蔵Ralph Hodgson関係資料とその周辺(二)」大原理恵『東北大学史料館研究報告』18 2023年3月
- 2) 「昭和九年から十二年まで」石原謙『東北大学法文学部略史』昭和28年3月28頁
- 3) *The Manyōshū ; one thousand poems selected and translated from the Japanese* Published for the Nippon gakujutsu shinkokai by the Iwanami shoten, 1940
- 4) 「ラーフ・ホヂソンの詩」土居光知『英語英文学世界』6-6 9月号 ホヂソン生誕百年記念号 英潮社 昭和46年8月11頁。『信綱と万葉集 令和元年度 佐佐木信綱記念館特別展図録』鈴鹿市 令和2年1月16頁「英語訳の正誤修正箇所一覧」(写真)のうち「修正案TENTATIVE TRANSLATIONS No.II」に「末行(中略)ヲ省キタシ(ホヂソン氏ノ希望モアリ)」との記述が見える。
- 5) 参考:『八木秀次』沢井実(人物叢書 日本歴史学会編集275)吉川弘文館 2013年
- 6) 引用者注:【講演】英国における明治時代の日本研究と書物交流 日本文学の本格的な紹介(翻訳)の前段階として 小山騰『国際日本文学研究集會會議録』34 2011年3月27頁によると1914年11月14日付。
- 7) 坪内逍遙の甥(一時期養子)。『坪内逍遙研究』坪内士行(早稲田選書)早稲田大学出版部 昭和28年 66頁。

たのだがツエツペリンが怖いのかイタリーへ行つてしまつたので困つて居た」と云つて浮世絵の落款の文字や木版本の草書の読みにくいものなどを出して来て尋ねた。(中略)西鶴物や枕の草紙などを持ち出してくる日もあつて、私も解しかねることが尠くなかつたが、「心にくき」だの「雅致」「風流の道」「現金な奴」などを説明するには骨が折れた。

『科学者の随筆 蟻の咳払い』八木秀次 修教社 昭和23年「光源氏のスポーツ」42-44頁  
『工学の散歩道』(科学随筆全集 第13) 吉田洋一・中谷宇吉郎・緒方富雄編 学生社 1962年所収

八木は若いころから古典を愛読<sup>8)</sup>し、自身の読書体験について「徒然草」を深く玩味したことが自分を強い厭世家にした。「漢籍の「大学」は朗かな勇氣と大望とを与えて呉れた。」(「学生時代の読書」『科学者の随筆 蟻の咳払い』八木秀次 181頁)「耽読したものには、源氏物語、戦争と平和、ドイツとイギリスの脚本」(同183頁)と記している。

大正6(1917)年土居光知は日本文学翻訳のあり方を批判し日本の英学者の関与を促した。

英人は要するに自国文明の優越を明かにし、また維持せんがために外国文明を研究し、我々が外国語或は外国文化の知識そのものを誇りとして居ることは、日本文学の翻訳をよんでも感じられる。日本人が英訳する時には原文の意味に忠実などいふことは第二の問題として、英人の書いたやうな英文にしようとし、イディオムを並べたてるのであるが、英人が翻訳する際には好奇心の対象となる grotesque なものとしたり、成丈け原書の価値を貶すやうな訳し方をしたりしたものが多いのである。〔Basil Hall Chamberlain (1850-1935) の〕古事記の英訳もその一つである

「日本文学の翻訳に就いて」(第三回) 土居光知

『英語青年』38-8(総号519) 研究社 大正7年1月15日 通頁236

この一節を書いた動機は訳者を非難せんがためではなく、この書の如きは日本人によつて改訳さるべき必要がありはしないかといふ問題を英学者の前に呈したいからである。 同上 通頁237

土居自身平安朝日記の英訳を行っているが、それは1915(大正4)年頃であつたという。共訳者の大森安仁子は福祉事業を行っており、その募金活動にこの日記英訳を用いた催し物が企画されたという事情から一般の注目をも集めたものと思われる。

いま日本文学を他国語に翻訳したと想像するとき、誇を以て「こゝに人間を見よ」と語りながら、彼等の敬愛を要求し得るものがどれほどあろうか。(中略)そのうちで普遍的な興味のあるものを求めるならば万葉が第一に来る。平安朝文学としては源氏物語であらうが蜻蛉日記、紫式部日記、和泉式部日記、枕草紙、更科日記、徒然草等、日記及び随筆は従前よりも価値を認めらるべきものではあるまいか。

「国民的文学と世界的文学」土居光知 『思想』2 岩波書店1921(大正10)年11月 81-82頁

『文学序説』土居光知 岩波書店 大正11年 所収

8) 参考として本稿で言及する人物の、若年時の日本古典への接し方を記す。新村出(1876-1967)は「私の〔静岡中学〕在学中は英語や漢文は相当に力をそそいだが、国文国語は、課せられずにすました。そのじぶんの低学年からは、あるいは課せられるようになったかもしれぬが、明治二十四、五年ごろの中学の高学年では、国文も文法も習わせられずにおわつた。(中略)そのころは、東京の一高、すなわち旧称の一高中学では、落合直文先生をはじめ、国文国語の復興や振興に力をそそいだ先覚者が輩出したころであつたにもかかわらず、その余沢は未だ近き東海道の駿府にまではおよばなかつたのだ。」「私の歌歴自叙」『五月富士』(読売新書) 新村出 読売新聞社 昭和30年 145頁 と回想する。『万葉苑枯葉』新村出 生活社 昭和23年「序文」には、「志学ほどなく、畠山健翁の「積義」に由つて、初めて万葉集の巻一の歌を通読し得た」1頁 とある。河野与一(1896-1984)は、神戸一中で漢文担当の鎌田春雄から作文の時間に万葉の歌(恋歌は除く)を教えられたという「武内さんに因む昔語り」『続 学問の曲り角』河野与一 岩波書店 1986年 209頁。

その上で直訳を試み、大森夫人〔Annie Shepley Omori大森安仁子〕に英語を添削してもらった。大森夫人はボストンで生れた画家であってイメージを重んじ、原文のイメージを英語で再生<sup>9)</sup>することに協力して下さったので、まことに幸いであった。これを訳したのは1915〔大正4〕年頃であったが、

『文学の伝統と交流』土居光知 岩波書店 昭和39年「日本文学の英訳」2意識の流れの表現 28頁 大正六、七、八年にかけて、有隣園は募金運動の一環として、各種の催し物を計画して推進した。(中略) 第三回は、三井の福井菊三郎氏邸(赤坂)を会場にして催しを開いた。このときは、平安朝時代の生活様式を披露するため読売新聞の美人記者山口嬢をモデルにし、十二単衣を着付けて披露し、一方では、大森安仁子・土居光知共訳になる英文「更級日記」を朗読して、平安時代のふんいきを盛りあげた。これらの催しは、各新聞が協力的に報道してくれたので、みな成功であった。

『無宿の足跡 わが青春の記』松田竹千代<sup>10)</sup> 講談社 昭和43年175頁

1920(大正9)年<sup>11)</sup>『更級日記』『紫式部日記』『和泉式部日記』の英訳にAmy Lowellの序文<sup>12)</sup>を添えた *Diaries of Court Ladies of Old Japan* がアメリカで刊行された。

〔翻訳には矢代幸雄 *Botticelli*<sup>13)</sup> 位手をかけなければうまく行かないと思うが〕余り英国人に見せると、全く英語になつてしまつて、日本文学の香気をすっかり失つてしまひ、Stevensonのまづいのや下手なHardyばりのものが出来てくる。土居光知氏と大森アニ子女史共訳の *Diaries of Japanese Court Ladies* はもう絶版の由であるが、なるべく日本語の *idiom*<sup>14)</sup> を生かす工夫をされたといふ事である。これなどは、日本語の特有な表現をいくらかでも感知させることが出来て良いと思ふが、これも度を過すとたゞ“amusing”であるに過ぎなくなる。

「英学雑記」〔福原麟太郎〕『英語青年』72-9(総号929) 昭和10年2月1日 30頁通頁318

『福原麟太郎著作集』9 研究社出版 昭和44年7月 所収413頁

矢代幸雄の *Botticelli* は、矢代自身の回顧によれば、大変な手数をかけたものである。特に、添削を行った英国人は矢代の文章の特色を消さないように注意し、また、知識教養のある読者を満足させるだけではなく、一般読者にもわかりやすい文章になるよう工夫をしている。

ヤシロの文章には、ヤシロ独得の性格と魅力とがある。それを彼自身が直せば、それは英国人ローレンス〔美術出版社メディチの編集者〕の当り前の文章になつてしまつて、ヤシロの血の通つた文章ではなくなり、従つてまた、ヤシロとしての特色も魅力も薄れてしまう、と言うのであった。(中略) 私の意図した意味を彼はよく聴き直し、その上で、この文章ではなぜいけないか、の理由をよく私に説明した上で「さあ、ヤシロ、どう直すか」と私自身に直させるのであった。(中略) 次には、文化人の代表として、『源氏物語』の英訳その他で

9) 引用者注：参考『言葉と歩く日記』多和田葉子(岩波新書 新赤版 1465) 岩波書店 2013年「国際的な場で話す場合は、まず日本語で考えてそれを英語に訳すのではなく、映像で考えてそれを英語に訳す」127頁

10) 同書154頁に大森安仁子の紹介がある。松田竹千代(1888-1980)は政治家。衆議院議員議長を務めた。『松田竹千代の生涯』松田澄江〔1981〕参照。

11) 「“Diaries of Court Ladies of Old Japan”」R.F.生『英語青年』46-12(総号619) 研究社 大正11年3月15日 370頁に紹介がある。

12) 土居によればAmy Lowellの計らいでHoughton Mifflinから出版されたという(「私の留学の頃」土居光知『英語青年』110-8(総号1386) 研究社 昭和39年8月1日20頁 通頁548『文芸その折り折り』土居光知 荒竹出版 昭和48年所収)。「土居光知生誕100年の縁 ハーヴァード大に眠る訳者序文の謎」高田康成『英語青年』132-8(総号1653) 研究社 昭和61年11月1日・「Amy Lowellのこと」蠻堂生『英語青年』53-8(総号699) 研究社 大正14年7月15日参照。

13) Yashiro, Yukio. *Sandro Botticelli*. London: Medici Society, 1925.

14) 引用者注：土居の *idiom* については「イディオムに就いて」(英語彙とその背景X) 土居光知『英語青年』55-2(総号717) 研究社 大正15年4月15日参照。

有名な、また私と親しい、そしてとくに文章家として知られているアーサー・ウェーレーに、全体を通読してもらい、不適當とか、まずい、とか思われる個所にしるしをつけてもらった。そしてその個所をまた前のようなやり方で、丁寧にローレンスと私とで直し、それが済んでから、さらに一般読者の代表として、出版社メディチ・ソサエティーの店に働く普通の娘さんに全部を通読させて、また解りにくいとか、読みづらい等々の個所にしるしをつけさせ、そこをまた直して、最後にこれでよろしい、となったのである。

『私の美術遍歴』矢代幸雄 岩波書店 1972年 9『ポティチェリ』のロンドン出版 116-118頁

*Diaries of Court Ladies of Old Japan* が昭和10年12月日本で刊行された際にも福原麟太郎が英文の紹介を書き「日本語の idiom を生かす工夫」について具体的な記述をしている。

How fastidious the translators were in rendering the originals into as close literal translations as possible can be seen everywhere in the text, as, for example:

“As the autumn season, approaches the Tsuchimikado becomes *inexpressively smile-giving*.”  
〔紫式部日記「秋のけはひの立つまゝに、土御門殿の有様、いはむかたなくをかし。」<sup>15)</sup>〕

or

“Even their footsteps along the gallery which sound *to-do-ro to-do-ro* are sacred.”  
〔紫式部日記「渡殿の端のとゞろ〜と踏みならさるゝさへぞ、ことごとくのけはひには似ぬ。」〕

The former is evidently not in English idiom, but still you can feel the sentiment as entertained by a Japanese of the romantic period in the Middle Ages. Nor is the latter in ordinary English, making use of coined onomatopoeic words, but repeat the passage, and you can feel the atmosphere of the Japanese court.

As a Japanese, I am ready to admit that the translations have succeeded in transplanting the Japanese sense of life into English soil.

["DIARIES OF COURT LADIES OF OLD JAPAN", DIARIES OF COURT LADIES OF OLD JAPAN, Translated by ANNIE S. OMORI & KOCHI DOI (2nd Edition), Tokyo: Kenkyusha, 1935, ¥3.50]

FUKUHARA RINTARO 『英文学研究』16-4 1936年 通頁620

ただ、こうした試みは必ずしも評価されなかった。「欧米における日記文学の紹介と研究」福田秀一<sup>16)</sup> はモリス<sup>17)</sup> や克蘭ストン<sup>18)</sup> の意見を参照しながら「奇妙な英語（例えば “On the moon-hidden day of the Ever-growing month[march 30, 1023]”<sup>19)</sup> の如き）」を問題視している。Donald Keene (1922-2019) は、第二次世界大戦中「アッツ島への敵前上陸をする直前に『紫式部日記』の英訳を読んだのです。（中略・ウェーレー訳『源氏物語』とは違って）ほんとに変な翻訳でした。けれども私は、また紫式部の魅力を感じました。」<sup>20)</sup> と回想しているが、これも大森・土居共訳<sup>21)</sup> ではないかと推測される。1961年復刊の際には坂西志保 (1896-1976)<sup>22)</sup> が好意的な書評をし「そ

15) 『平安朝日記集』三浦理編（有朋堂文庫）有朋堂書店 大正2年8月による。ただし土居は『平安朝日記集』については有朋堂文庫の本文を信用していない。『英文学の感覚』土居光知 昭和10年 371頁・『文学の伝統と交流』土居光知 岩波書店 昭和39年 28頁参照。

16) 『海外の日本文学』福田秀一 武蔵野書院 1994年 107頁 初出：『国語と国文学』59-8 昭和57年 8月

17) Ivan Morris (1925-1976) 更級日記を英訳 (*As I crossed a bridge of dreams; recollections of a woman in eleventh-century Japan*.1971)。同書Introduction p28参照。なお、『更級日記』概説(Ⅰ) 伊藤守幸『学習院女子大学紀要』12 平成22年3月 はMorris訳について「読者の読み易さへの配慮が、原典の持ち味を生かすことよりも優先されている」3頁 とする。

18) Edwin Augustus Cranston (1932-) 和泉式部日記を英訳 (*The Izumi Shikibu Diary: A Romance of the Heian Cour.* 1969)。同書Introduction Nore of translation p192参照。



れ〔和歌〕が誠に忠実に、しかも立派な英語として再生されている。」<sup>23)</sup>とする。

土居は前に引用した文章ではチェンバレン『古事記』英訳の不適切な面は翻訳者の文化的優越感が原因としているようであるが、後に「イメジャリ (imagery 詩的心象)」<sup>24)</sup>を重視する。

上にあげた本〔*The Imagist Movement*〕は、フェノロッサ (Ernest Francisco Fenollosa) がボストンにたずさえ帰った謡曲、俳諧、漢詩の整理出版をパウンド (Ezra Pound) が委託され、原稿をパウンドやロウエル女史 (Amy Lowell) などが読んだ結果も重要視しなければならないことを述べてあった。(中略)

それはとにかくとして、この翻訳がアメリカの新文芸運動に寄与するところが多かったとすれば、それは謡曲や、俳諧や、歌および物語の古典文学が詩的心象 (イメジャリ) の連鎖からなっており、東洋の古典美術と同質の美を含んでいること、それをフェノロッサが知り、平田〔禿木〕<sup>25)</sup>さんに翻訳を頼み、平田さんが日本人的な特徴を持つイメジャリを英文の上に移すことに努めた結果と言わねばなるまい。

イギリスの言語学者チェンバーレン (Basil Hall Chamberlain) が古事記を英訳するに当っては、国学者の門をたたき、日本古代語の解釈を聞き、また本居宣長の古事記伝を読むなどして、翻訳を始めたという。(中略) が、この古事記の英訳からはイメジャリがほとんど消失してしまっている。

『文学の伝統と交流』土居光知 岩波書店 昭和39年「日本文学の英訳」1 詩的心象の再生 14-15頁  
初出：『詩的心象と日本文学の翻訳』土居光知『英語青年』108-2 (総号1356) 研究社 昭和37年2月1日

昭和5 (1930) 年宮森麻太郎<sup>26)</sup> (1869-1952) は『英訳古今俳句一千吟 One thousand haiku, ancient and modern』を刊行し緒言で外国人による日本文学翻訳に不信感を示した。

- 
- 19) 引用者注：『*The Sarashina Diary*』p22。「3月30日」ではなく「弥生のつごもり」であることを訳に含ませようとしたのであろう。Ivan Morris 訳 (p49) 及び『*The Sarashina diary: a woman's life in eleventh-century Japan*』Sugawara no Takasue no Musume; translated, with an introduction, by Sonja Arntzen and Ito Moriyuki (Translations from the Asian classics) Columbia University Press, c2014ではthe end of the Third Month (p116)。これは陰暦であることを示すもので、学術振興会訳『万葉集』にもthe 30th of the 3rd month (巻十七 3985-3987 左注「三月三十日」)・the fifteenth of the ninth (巻六 935-937題詞「九月十五日」)等が見られるが、the mid-June day (巻三 320番「六月十五日」)のように訳する場合もある。学術振興会訳『万葉集』NOTES X参照。
- 20) 『古典を楽しむ私の日本文学』ドナルド・キーン (朝日選書393) 朝日新聞社 1990年1月『『源氏物語』と私』12頁 初出：『【講演】『源氏物語』と私』1988年10月8日『日本の文学』(ドナルド・キーン著作集 第1巻) 新潮社 2011年12月所収
- 21) 「私はカリフォルニアで、紫式部、和泉式部、孝標女などの、日記の英訳を一冊にした本を買った。まことに奇妙なことに思えるだろうが、この書物こそ、アメリカ軍のアッツ島攻撃が始まる直前、私が毎日読んでいた本なのである。『百代の过客』(ドナルド・キーン著作集 第2巻) 新潮社 2012年2月23頁。初出：『百代の过客 日記にみる日本人』7「兵士の記録」ドナルド・キーン (金関寿夫訳) 朝日新聞 1983年7月12日夕刊。初刊：『百代の过客 日記にみる日本人』上 (朝日選書259) 朝日新聞社 1984年。
- 22) 1922年よりアメリカに留学、1930年より米国議会図書館で日本語資料の整理・収集・目録編纂を担当、また『一握の砂』・『みだれ髪』等を翻訳している。参考：『坂西志保さん』国際文化会館 1977年
- 23) 【新刊書架】『*Diaries of Court Ladies of Old Japan*』坂西志保『英語青年』108-3 (総号1357) 研究社 昭和37年3月1日 164頁
- 24) 土居の「詩的心象」については『古代伝説と文学』土居光知 岩波書店 1960年参照。『土居光知著作集』第2巻 (古代伝説と文学) 岩波書店 1977年4月所収
- 25) 引用者注：『英文学夜話』(研究社英米文学語学選書) 矢野峰人研究社出版 1955年 七、フェノロッサと平田禿木ー能楽の英訳をめぐるー参照
- 26) 近代文学研究叢書 72巻「宮森麻太郎」昭和女子大学近代文化研究所 平成9年4月

著者は嘗てハーン (Hearn)、アストン (Aston)、チェンバリン等の外国人の日本文学の翻訳に絶対の信用と敬意とを捧げてみましたが、七八年来これを原文と対照して子細に研究しました結果、この人たちの翻訳特に俳句のそれに、誤訳又はくたぐたしいパラフレーズが可なり多くて、俳句の精神を伝えてみないのに驚かされ、これでは日本文学の外国語訳は日本人の手に依るの外はない、といふ結論に到達しました。

『英訳古今俳句一千吟』同文社 昭和5年「俳句英訳の動機」1頁

東北帝国大学教授であった小宮豊隆 (1884-1966) は宮森の翻訳にふれつつ発句の翻訳可能性自体を疑問視する「発句翻訳の可能性」『芭蕉の研究』<sup>27)</sup> 小宮豊隆 岩波書店 昭和8年 初出：『文藝春秋』昭和8年8月号を公表した。詩人萩原朔太郎 (1886-1942) は小宮に同意し辛辣な翻訳批判を行った。一方、ウエーリー訳『源氏物語』を愛好した正宗白鳥 (1879-1962) は楽観的である。山宮允は翌年「多くの翻訳論の出現の直接の刺戟になつたと思はれるのは「文藝春秋」八月号に掲載された小宮豊隆氏の「発句翻訳の可能性」<sup>28)</sup> とし議論<sup>29)</sup> を整理した。

俳句の翻訳の不可能に就いて、小宮豊隆氏の説いたのは正論である。(中略) 西洋の詩でもかくの如く、最近の詩は特に言葉の聯想を重視しイメージを内容にしてみるのだから、翻訳の不可能の事は言ふ迄もない。(中略) 多くの場合に、外国人に好評される日本の者は、真の純粋の日本ではなく、彼等のフジヤマやゲイシャガールの概念性に、矛盾なく調和して入り得る程度の、テンブラフライ式の似而非日本である。(中略) 日本に居住することなく、日本の文学を全く読まず、日本に就いて知る所の殆んどない一般の欧米人が、宮森氏の訳を通じて、芭蕉等の俳句が解り得る道理はない。

「詩の翻訳に就いて」萩原朔太郎『生理』<sup>30)</sup> 3 昭和8年11月 12-16頁  
八月号の文藝春秋には、小宮豊隆氏が、「発句翻訳の可能性」と題し、芭蕉の「古池」の句の英訳を批評して不満の意を洩らしてゐる。(中略) 日本人が頭で考へて、かういふ翻訳したら、外人に解るであらうと索り、日本語を外語に移したのは、意味は正しきを得ても、妙味は伝へられないに極つてゐる。しかし、ウエーリーのやうな天才が真に日本の詩歌小説などを愛好し心酔して、翻訳するやうになつたら、東西言語の相違の難関を突破し得られるであらう。

「文芸時評」正宗白鳥『改造』昭和8 (1933) 年9月 196頁  
私は、「帰つたら、あの続きが読めるのだ」と、それを楽しみにして、林間の小径を辿つて丘の家へ帰つて行くのである。読んでゐるのは英文に翻訳された「源氏物語」であるが、そこに現はれて来る人物は、軽井沢の途上に散見される翻訳的青年男女<sup>31)</sup> をもつと美しくいゝ人間に作り上げ、それ等の心々をも描いてゐるやうで面白い。

『我最近の文学評論』(文芸復興叢書 第20) 正宗白鳥 改造社 昭和9年「軽井沢にて」226頁  
初出：『文藝春秋』11-10 昭和8年10月

27) 序文 (昭和8年9月) に小宮は「私は、少し芭蕉に狎れすぎたやうな気がする。(中略) さういふ私の芭蕉に対する関係に一応の段落をつけるといふ意味で、〔この書の出版は〕少くとも私一己にとつては、十分意味のある事であつた。」と記す。

28) 「訳詩論」山宮允『英語英文学講座』英語英文学刊行会 昭和9 (1934) 年3月

29) 『日本の翻訳論 アンソロジーと解題』柳父章・水野的・長沼美香子編 法政大学出版社 2010年 小宮豊隆「発句翻訳の可能性」(佐藤美希解題)・萩原朔太郎「詩の翻譯について」(水野的解題) 参照。

30) 「萩原朔太郎自家版」引用は近代文芸復刻叢刊 冬至書房 昭和39年による。

31) 引用者注：「この地〔軽井沢〕にうろこしてゐる青年男女の風俗や挙動が、外人のイミテーションとしか思へない」同223頁

この時期の源氏物語享受について芥川龍之介(1892-1927)は「僕は「源氏物語」を褒める大勢の人々に遭遇した。が、実際読んでゐるのは(理解し、享樂してゐるのを問はないにもせよ)僕と交つてゐる小説家の中ではたつた二人、——谷崎潤一郎氏と明石敏夫氏とばかりだつた。」<sup>32)</sup>とするが、土居光知は「湖月抄で源氏物語を読む人は三四巻で中止する。私の知つてゐる限りに於いて源氏物語を読み通した人は有朋堂文庫<sup>33)</sup>を用ひた人である。」(『英文学の感覚』土居光知 岩波書店 昭和10年 趣味の英書 二愛書の体裁 371頁)といい、さらに「十二折版にすること等を考案したのは英文学者菅野徳助氏<sup>34)</sup>」と英文学者の日本古典普及についての功績を付け加えている。日本の古典を、洋書の趣味を満足させる体裁の書物で鑑賞することができたのである。

自身の作品を翻訳される立場の作家・詩人はどうであったか。ホジソンと同世代の詩人土井晩翠(1871-1952)は作詩の段階から既に翻訳を意識していたと推察される。

詩経、易経、書経は向後われのインスピレーションたるべし。況んや之に印度、ペルシヤ、グリース、ローマ、英、仏独、伊を加ふるに於いてをや。集大成！ 「日誌抄録」<sup>35)</sup>(昭和3年)十一月一日  
エンリコ君—下位〔春吉<sup>36)</sup>〕君—ローマ公使館—芳沢外相—**ダヌンチオ**—ムソリーニ—「天馬の道に」の最後の章はイタリヤ韻文に訳して貰ひたい。「世界平和」を願ふたものであるから。(昭和7年)三月十四日  
ラスキンであったか「最上最多のIdeasを盛れ」といったのは。—かかる意味で詩集をかきたい。  
集大成である。外国語に訳されても価値のあるやうに。

(星落秋風五丈原が支那語に<sup>37)</sup>訳されたのを五月十日二高理科三年生三組平岡が私に持ってきてくれた)

訳者は関東州青島遼寧路に勤めつつある西宮照(熙公)訳としてゐる。姓の音だけ仮りたものと自らいふ。  
(昭和7年)五月六日

晩翠は、自身の詩が翻訳されることを喜び、下位らの活動に、その政治的側面も含めて期待している。「天馬の道に」がイタリア語に、「星落秋風五丈原」が中国語に訳されるのは、それぞれの詩の由来するところの言語に戻すという意味もあろう。日本人の漢詩は評価せず「私はこれ迄日本人の漢詩はろくに読んだことは無かつた」(『日誌抄録』昭和8年3月)とある。

谷崎潤一郎(1886-1965)は自身の作品が日本の文化宣伝に利用されることは快く思わなかつた。

32) 『芥川龍之介全集』15 岩波書店 1997年「文芸的な、余りに文芸的な」三十七「古典」初出：『改造』9-8 昭和2(1927)年8月

33) 引用者注：『源氏物語』1-4 三浦理編(有朋堂文庫)有朋堂書店 大正3(1914)年。『よみがえる与謝野晶子の源氏物語』神野藤昭夫 花鳥社 2022年 67-68頁参照。なお、版本時代にも『絵入源氏物語』小本の存在があり、与謝野晶子(1878-1942)はこれを所持していた(『よみがえる与謝野晶子の源氏物語』122頁)。なお、東北大学漱石文庫『源氏物語 附 引歌並爪引』漱/1424も小本である。

34) 引用者注：菅野徳助(1870-1915)「菅野徳助氏逝く」『英語青年』32-9(総号448) 研究社 大正4年2月1日 293-294頁

35) 『晩翠先生と夫人 資料と思出』黒川利雄 昭和46年

36) 引用者注：「東北大学所蔵Ralph Hodgson関係資料とその周辺(一)」大原理恵『東北大学史料館研究報告』17 2022年3月24頁参照

37) 第二高等学校校友会誌『尚志會雑誌』151 1932年6月に、晩翠の「荒城の月」(H・T・ジョーンズ英訳)と「星落秋風五丈原」(熙公漢訳・青島民報『副刊民報』1932年4月19日より6日間連載)が掲載されている。Hugo Thomas Jonesは、第二高等学校備外国人教師(英Oxford大Bachelor of Science・Master of Arts)、熙公は同誌「編輯後記」佐藤功(117頁)によれば「支那の詩人」で二高の留学生ではない。

此の頃われ〜の創作を英独仏の諸国語に訳し、彼の地で出版したり上演したりすることが一つの流行になっている。(中略) それらはそれ〜翻訳者から出先きの日本大使館を通じて東京の外務省へ翻訳許可の照会があり、外務省の情報部は更にそれを原作者たる私の許へ取り次ぐのである。(中略) 委しい様子は分らないけれども、私の「恐怖時代」が翻訳されるのは、(中略) 何か向うに、日本の文化を宣伝するのを目的とする特別な協会のやうなものが、在留邦人に依つて組織されてみて、実はそれらの人々の企てであるらしい。(中略) 往年此の戯曲が始めて「中央公論」誌上に発表された時、余り残酷過ぎると云ふ廉で発売禁止の厄に遭つたことを思へば、それが今更外務省のお取り次ぎで日本文学の宣伝に使はれるのが笑止でならない。

『谷崎潤一郎全集』12 中央公論新社 2017年4月 340-343頁 初出：『改造』9-8 昭和2年8月  
『饒舌録』谷崎潤一郎 改造社 昭和4年所収

ただ谷崎は続けて「日本人は兎角政府が肩を入れてある仕事だと、何の彼のとケチを付けたがる癖があるが、そんな気は私には毫頭ない」(343頁)と記す。ホジソンが参加した万葉集英訳も、日本学術振興会による公的事業として行われたことがその評価に影響することになる。

## 9. 日本学術振興会 万葉集英訳事業 ——前段階と初期段階——

日本学術振興会万葉集英訳事業発足以前から、佐佐木信綱(1872-1963)は万葉集翻訳を志しその準備を進めていた。佐佐木は万葉集関連書の集書に努めたが、欧文翻訳書も対象であった。佐佐木とその周囲の集書活動をたどりながら、初期の万葉集欧訳状況<sup>38)</sup>を概観し、また当時の東北大学附属図書館の欧訳書所蔵状況(ホジソンが閲覧したとは限らないが)を確認する。

更に外人で万葉集の翻訳を試みた最初の人は、維納の有名な東洋学者フィッツマイヤー氏であらう。(中略)氏が万葉集の翻訳<sup>39)</sup>は、巻四の大部分のみであるが、原文を掲げ、訳文と註とが添つて居て、その書式など、参考とするに足りる。こたび狩野亨吉博士<sup>40)</sup>から贈られたので、こゝに一葉を写真版として挿入しておく。(中略)西暦一八七二年、即ち明治五年維納で出版されたものである。(中略)新村博士よりの書牘によると、フィッツマイヤー及びボフマンの日本研究の資料は、多くはシーボルトの舶載したものと思はれる。

『和歌史の研究』佐佐木信綱 大日本学術協会 大正4(1915)年「外人の万葉集翻訳」111-112頁  
私が博士と直接相知るに至つたのは大正五年春、欧米の留学から帰朝して間もなくのことであつた。(中略)お出で下さつて、だいぶあちらで本を集められたと聞いたが、もしやフィッツマイヤーが万葉集の一部を独訳したものをお求めにはならなかつたか、これは自分が長年探し求めていて、どうしても手にはいらない本なのだが、というお話。この本は自分も学生時代から名だけは金沢庄三郎博士<sup>41)</sup>から教つて知つていたが古本屋の目録にはとうとう見かけなかつたものである。(中略)この本も二度カタログにあらわれた。とりあえず

38) 初期の万葉集欧訳と佐佐木信綱の活動の詳細については「黎明期の万葉集翻訳」小倉久美子・「記紀万葉翻訳書リスト(暫定)」『万葉古代学研究年報』15 奈良県立万葉文化館 2017年3月参照。

39) 引用者注: *Gedichte aus der Sammlung der Zehntausend Blätter* 『和歌史の研究』113頁に写真掲載、和歌は縦書。「黎明期の万葉集翻訳」小倉久美子13頁に収載歌番号を記す。また同論文12頁によれば、石川武美記念図書館所蔵(旧竹柏園蔵)のそれは狩野の所贈である。

40) 狩野亨吉(1865-1942)は集書家で安藤昌益の発見者として知られる。『竹柏園蔵書志』佐佐木信綱編 巖松堂書店 昭和14年に狩野の旧蔵書が数点ある。『歌学論叢』佐佐木信綱 博文館 明治41年にも「この書〔『長歌玉琴』六人部是香〕はかねて其名は知つてゐたが、所々搜索して、漸く狩野亨吉氏から借り得たのである。」74頁とある。『長歌玉琴』は現在東北大学附属図書館所蔵(狩野文庫4-10381-1 伊3/304)。

41) 引用者注: 金沢庄三郎(1872-1967)。市河は東京帝国大学学生時、講師であつた金沢に朝鮮語・アイヌ語を習つた(『市河三喜伝 英語に生きた男の出自、経歴、業績、人生』神山孝夫 研究社 2023年 127頁)。



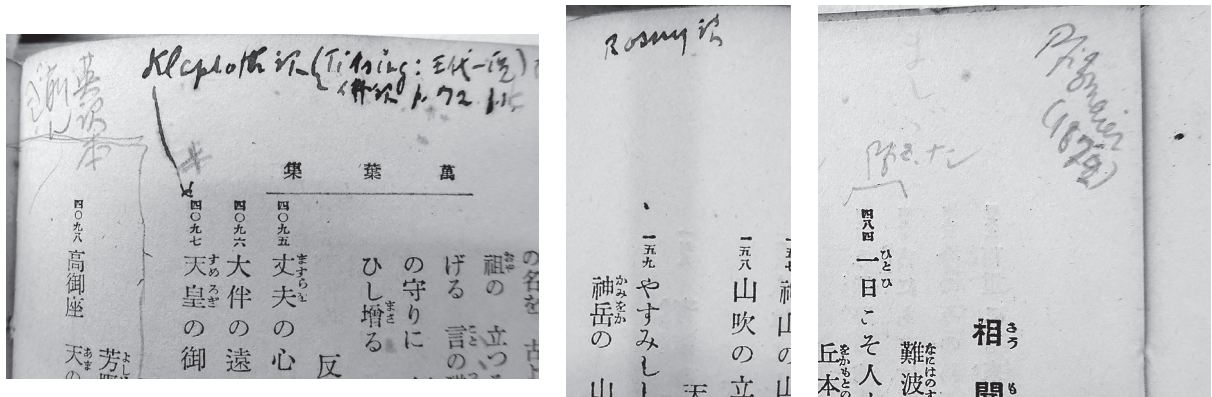
一部は自分に一部は博士のために注文した。

「英訳万葉集に就いて」市河三喜 『余情』8【佐木信綱研究】千日書房 1948年6月 22頁

これらの記述は齟齬するところもあるが、市河三喜(1886-1970)の助力については「架蔵の典籍の中、この種のもので、王堂先生〔Chamberlain〕から贈られたもの、市河博士の好意によつて手に入つたもの等」(「万葉集の外国語訳本」『万葉漫筆』佐佐木信綱 改造社 昭和2年 138頁)との記述もある。「万葉集の外国語訳本」には、Waleyと文通するようになって *Japanese Poetry* を贈られ、ダンテ学者大賀〔寿吉・旭江〕<sup>42)</sup>・京都大学附属図書館職員笹岡〔民次郎〕<sup>43)</sup>にも依頼したことなどが記されている。

『万葉苑枯葉』新村出(1876-1967)生活社 昭和23年 収載の「万葉集の欧訳」(初出:「萬葉集の欧訳について」新村出『心の花』25-11 大正10年11月)は倫敦で執筆したもので、クラブロート・ローニー・フイツマイエル・ワーレー(ウエーリー)の翻訳について述べ、彼らが依拠したと思われる文献についても調査している。「ピアソンの万葉英訳その他」(初出:『心の花』36-12 昭和7年12月「内外に併せ薦む」)には昭和7年渡航時にピアソンに面会したことが書かれている。「海外の万葉研究」(初出:『万葉集講座』2 昭和8年4月)は、翻訳のほか研究や紹介についてもまとめたもので、末尾には「欧文欧人万葉研究年表」「欧文万葉訳述研究書目」「万葉研究人名録」がある。「枕草紙の英訳」新村出『心の花』3 4-1 竹柏会 昭和5年1月はウエーリーの枕草子英訳の紹介だが、「〔ウエーリーの〕万葉の歌の抄訳は一九二一年私の在英当時であつたからその抜刷を佐佐木和田(英)両氏に贈りなどしたこともあつた」(16頁)とある。

新村出記念財団重山文庫所蔵『新訓萬葉集』上・下 佐々木信綱編 岩波文庫 岩波書店 昭和2年<sup>44)</sup>は、新村が昭和7年渡航時に携え、書き込みをしたものである。上・下巻ともに表紙に「1932 昭和七年 海彼渡航「携帯」〔朱書〕五部書之一」と記されている。

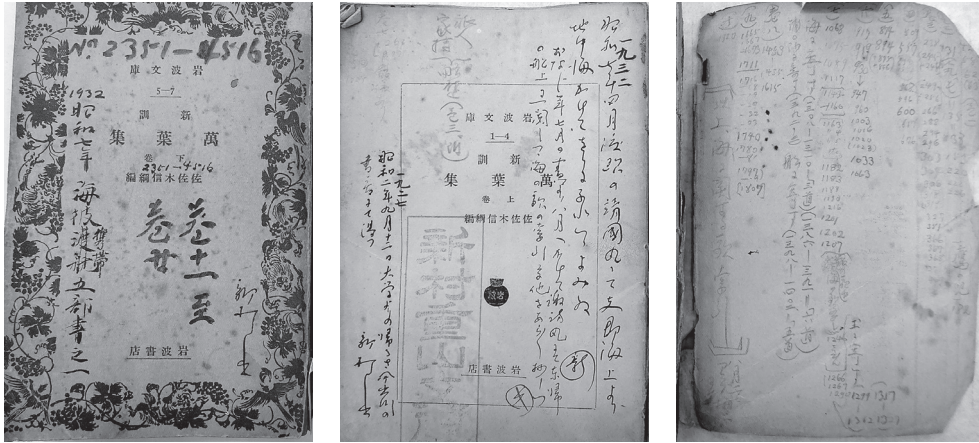


【写真1】新村出記念財団 重山文庫所蔵 岩波文庫『新訓萬葉集』  
Heinrich Julius Klaproth (1783-1835) Léon Louis Lucien Prunol de Rosny (1837-1914)  
August Pfizmaier (1808-1887) の翻訳歌の部分に書入がある<sup>45)</sup>

42) 「詩聖ダンテに魅せられた明治人のコレクション 旭江文庫」村橋ルチア『静脩』19 京都大学附属図書館 1982年4月・「旭江文庫」の生みの親大賀寿吉氏のこと」岩倉具忠『静脩』29-3 1993年1月参照

43) 「片々録」笹岡民次郎氏逝去『英語青年』90-2 (総号1138) 研究社 昭和19年2月1日・『京都大学附属図書館六十年史』附録 I 職員-4 旧職員 302頁参照

44) 『重山文庫目録』II 新村出記念財団 1998年 554頁



【写真2】新村出記念財団 重山文庫所蔵 岩波文庫『新訓萬葉集』下巻表紙 上巻扉・上巻表紙裏

二年まへ防空壕にはいつたとき、家庭から逃避せんとしたとき、何年まへかの汽車汽船の旅路、隨身して携提したものは、先づ万葉集と七部集とであつた。(中略)万葉と七部集と外三書<sup>46)</sup>を、海彼五部書と標して遠西に携提したものが、珍藏本となつて残つてゐる様に私には釋氣又痴心がある。

「芭蕉回顧」新村出『芭蕉研究』3 芭蕉研究会編 靖文社 昭和22年11月 10頁  
『新村出全集』第14巻 筑摩書房 昭和47年3月所収

文庫本の上・下巻表紙裏には海に関する歌の番号を巻ごとに記し索引としている<sup>47)</sup>。扉に昭和7年4月渡欧時(靖国丸)読み、帰途(諏訪丸)(7月・下巻は8月)に「海の歌の索引」をものしたとの書き付けがある<sup>48)</sup>。新村はかつて日本文学は「海洋趣味」に乏しいと嘆く文章を著わし『万葉集』も例外ではないとしていたが、海上<sup>49)</sup>で再検討を試みたのであろうか。

日本文学の海洋趣味に乏しいことは今更書きたつてもないが、実にこの四面環海の島国にも似合はぬ話である。(中略)遣唐使船の十有余回にわたる往来は、国史を読むに、波瀾曲折に富むもの頗る多きにかゝらず、

45) 4098番歌の上に「英訳本削ルベシ」とあり4098番-4100番(長歌一首反歌二首)が囲まれている。「日本学術振興会『英訳萬葉集』(一九四〇)の〈和文草稿〉をめぐる考察」河路由佳『戦争と萬葉集』5 戦争と萬葉集研究会 2023年2月 135頁 表2によれば4098番-4100番は橋本進吉の草稿があるが英訳はない。

46) 引用者注:『典籍雑考』新村出 筑摩書房 昭和19年「渡欧の船上より」22頁(初出:『書物展望』昭和7年6月)によれば岩波文庫『新訂万葉集』『芭蕉七部集』『無村七部集』『日蓮上人文抄』『正法眼藏隨聞記』。

47) 「さういふ場合〔旅行中〕の読書の際には、赤や青の鉛筆で、(中略)快適の文句語句に記るしを付けることをするばかりでなく、私は本の前後の余白にもつてきて、それらの語句の索引を書いておくことが多い。』『典籍雑考』新村出 筑摩書房 昭和19年「老境の雑書雑讀」2頁(初出:『図書』昭和14年1月)

48) 「私の歌心をそだてて、なにせよ私をここまで歌を歩道にひっぱってきたのは、昭和七年(一九三二)の春夏かけての西欧三渡のおりの、きりよの歌、一遊歌数百首の吟詠である。」「私の歌歴自叙」『五月富士』読売新書 新村出 読売新聞社 昭和30年 175頁。『花草鳥紙』新村出 中央公論社 昭和10年「西遊漫吟」(初出:『靈鳥』昭和8年3月)『歌集 牡丹の園』新村出 白楊社 昭和27年「西航雜詠」「遊歐詞藻」「東歸漫吟」はこの昭和7年の詠より選んだもの。

49) 「賊になるなら海賊になつて見たいと私はバイロンの「海賊行(The corsair)」を読んだときにさう思つた。」「海賊の話」(大正十一年八月)『南蛮更紗』151頁。『海の手』(A book of the sea)』を大正10年の航時に読み、昭和7年も携行した(『典籍雑考』新村出 筑摩書房 昭和19年「渡欧の船上より」23-24頁)。

之に関する歌は万葉集中長短二十三首古今集中僅に一二首を数ふるに止まり、而も皆海路の平安を祈る送別の類か唐中本国を慕ふ意味のものかに過ぎぬ。

「日本文学の海洋趣味」(大正五年八月七日)『南蛮更紗』新村出 改造社 大正13年 138-139頁

阿部次郎(1883-1959)は、海洋文学としての『万葉集』を高く評価、『万葉集』とギリシャ抒情詩を類似するとし、特に英訳された人麿の歌からそれを感じるという。そこにみられる「外国関係の多事が齎した好影響」「国家的機会に乗じてその代表人物のために制作する」という把握には注意しておく必要があるであろう。

遣唐使や遣新羅使の往復は、当時に於ける海路の困難を思へば、想像し得る限りの深刻な体験をその一行に与へなければならぬ。これに筑紫に於ける辺防の要務をも加へて、万葉人は従来の日本史上最も深く海洋との接触を持つてゐた。さうしてそれが万葉集をして世界有数の海洋文学たらしめる。(中略)それが心の底に体験された海であつて、決して沿岸遊覧の歌に墮してゐないことは、様々の意味に於ける外国関係の多事が齎した好影響と云はなければならぬ【マ】ぬ。

「世界文学と万葉集」阿部次郎

『万葉集講座』5 佐佐木信綱・藤村作・吉沢義則等監修 春陽堂 昭和8年9月 250頁  
西洋文学のうちで万葉時代の日本の文学に最も類似点を持つのは、恐くは希臘の抒情詩である。(中略)ピンダロスは(中略)、外国文化の新しい学習によつて漸く文化的新存在を獲得せねばならぬ〔柿本〕人麿時代のやうな対外的折衝を知らなかつた。併し両者ともに国運の高まりを身に感じつゝ、国家的機会に乗じてその代表人物のために制作するといふ位置に立つてゐた。(中略)人麿の「日並皇子尊の殯宮の時」(一六七)の歌の起首をアストンの英訳<sup>50)</sup>を通して読むとき、我々はそれが如何にピンダロスの高揚に近いかを感じるであらう——  
同 224-227頁

佐佐木信綱は「その後著されたもので、吾人が架中に蔵してゐるのは、チェンバレエン氏の日本古代の詩歌<sup>51)</sup>、ヂッキンス氏のジヤパニイステキスツ<sup>52)</sup>中には、いづれも万葉の歌の訳を含んで居る。フロオレンツ氏もその訳に従事してゐたと聞いた。(中略)万葉集は今や世界的の文学とならうとして居る。」(『和歌史の研究』佐佐木信綱 大正4年「外人の万葉集翻訳」114頁)とする一方「先生〔チェンバレン〕とメーソン氏の合著になる日本案内記がいかにも精細なので、日本人でも英語を解する者は、それを携へて旅行するのが便利であるとのことを思ひ起し、万葉集のごときも、英訳せられたものを日本人が読むやうになるかも知れぬ」(『ある老歌人の思ひ出 自伝と交友の面影』佐佐木信綱 朝日新聞社 昭和28年「万葉六十年」55頁)との思いもあった。

「英訳万葉集ニ就テ」市河三喜『委員総会研究報告講演集』3 日本学術振興会 昭和13年1月 も欧訳の概観(8. 外人ノ万葉英訳ノ検討)を含むが、その性質上先行する翻訳には批判的である。「チェーン

50) 引用者注：『日本文学史』W.G.Aston著 芝野六助訳補 大日本圖書 1908年もこの英訳(59頁)を示す。東北大学附属図書館蔵書Aston, W.G. *A history of Japanese literature*. London: William Heinemann, 1907 (Short histories of the literatures of the world; 6) は大正14年3月13日受入 登録番号: 洋甲4546。「海外の万葉研究」新村出『萬葉集講座』2 春陽堂 昭和8年4月は「訳歌の巧妙さは定評がある」142頁とする。

51) 東北大学附属図書館にはChamberlain, Basil Hall. *The classical poetry of the Japanese*. London: Trübner 1880 (Trübner's Oriental series) 受入: 大正14年7月10日 登録番号: 洋甲7665がある。

52) 東北大学附属図書館にはミュンスターベルク文庫(大正14年購入)にDickins, Frederick Victor. *Primitive & mediaeval Japanese texts*. Oxford: Clarendon Press, 1906を所蔵する。



バレンノ訳ハ、コレハ翻訳トイフヨリモ、寧ロ原歌ノ意味ヲ吞込ンデ自分ノモノトシ、自分ノ英語デ書キ直シタモノデアツテ、翻訳トイフヨリモ改作デアル。」(36-37頁)「〔ディキンズ訳は〕ソノ使ツテキル英語ハ極メテ古メカシイ英語<sup>53)</sup>デ、今日“Wardour Street English〔骨董化した英語〕”トイッテ軽蔑サレテキル英語デアル。(中略)コウイフ調子ノ訳ハ今日ノ人ニハ appealシナイ。」(38頁)「ウォルシ及ビペーヂ<sup>54)</sup>ナドイフ人ガアツテ、殊ニペーヂノ如キハ極メテ自由ナ訳シ方」(39頁)「〔ウエーレー訳は〕散文詩デアルガ、此人ノガ一番ヨク出来テキルヤウニ思ハレル」(40頁)としながら誤訳を指摘する。ウォルシはClara A. Walshか。「金澤教授の倫敦通信(ウォルシュ嬢に就きて)」金沢久<sup>55)</sup>・「萬葉集の長歌英譯」ウォルシュ嬢『英語青年』20-10(総号305) 研究社 明治42(1909)年2月15日によれば、来日経験はなくハーンの著書やチェンバレンの辞典を用い独学で万葉集や古今集を英詩に翻訳していた。柿本人麻呂泣血哀慟歌の英訳が示されているが、Frederick Victor Dickins(1838-1915)の*Primitive and mediaeval Japanese texts*の「逐語訳」から訳し直したという。ほどなくWalsh, Clara A. *The master-singers of Japan: being verse translations from the Japanese poets.* (The wisdom of the East series) J. Murray, 1910が刊行される。

英訳事業に参加した斎藤茂吉(1882-1953)の集書は自著『柿本人麿』に記されている。

短歌評釈参考の項に、外国人の手に成つた外国語翻訳を記して置いたのは、他意あるのではない。本邦でも既に岡田氏宮森氏等の選訳が出版せられてあるほかに、近く日本学術振興会第十七小委員会の英訳万葉集が出てむとしつつあるので、其等に前行した外国人の翻訳を参考比較するもまた興味あることにおもひ、また翻訳歌に顧慮せられる人々の手数を省くうへにも役立つこととおもつたのであつた。纂集につきては、佐佐木信綱(フィツマイエル・チャンバレン・ピアソン・デイツキンズ)・河野興一<sup>56)</sup>(ピアソン・グンデルト)・藤森朋夫(ポノー) 諸氏の好意に依り、家蔵のもの(アストン・フロレンツ・ロレンツエン<sup>57)</sup>)をも引用した。

『柿本人麿』評釈篇 卷之上 斎藤茂吉 岩波書店 昭和12年5月「自序」昭和12年3月 4-5頁

昭和7年6月5日、佐佐木信綱の還暦記念祝賀会が催された。会場は「男女半ばづゝ」で「あらゆる階級の人々を網羅」していたという<sup>58)</sup>。最後に佐佐木の謝辞があり、「唯今自分の胸に抱いてをる二三の希望」として、第一に西本願寺旧蔵本万葉集の出版、第二に定本万葉集の完成、そして「第三には、我が国の歌謡を外国語訳するといふ事業」をあげ、すでに外国語訳は多数あるが「我が国の歌は、我が国の人の訳するが最もよいことは、申す迄もありません。(中略)幸に

53) 引用者注:「F.V.ディキンズがとらえた『万葉集』の詩学」ジェイスン ウェッ『万葉古代学研究年報』15 奈良県立万葉文化館 2017年3月は19世紀前半英国ロマン主義詩に似ているとする(59頁)。

54) Curtis Hidden Page(1870-1946) 東北大学附属図書館所蔵Page, Curtis Hidden. *Japanese poetry: an historical essay with two hundred and thirty translations.* Boston: Houghton Mifflin, 1923 は大正13年6月23日受入 登録番号: 洋甲2626

55) 金沢久(1866-1925)「金澤久君を憶ふ」佐伯好郎『英語青年』53-4(総号695) 研究社 大正14(1925)年5月15日・「金澤久氏を悼む」磯邊彌一郎『英語青年』53-5(総号696) 研究社 大正14年6月1日参照

56) 引用者注: 斎藤茂吉日記昭和9年12月27日「河野氏ヨリPea[ie]rson 三冊トバク」(以下、斎藤茂吉日記の引用は『斎藤茂吉全集』30 岩波書店 昭和49年による)

57) 引用者注: 斎藤茂吉日記 昭和10年3月18日「ロレンツエンノ独逸訳ヲバ筆写シ」

58) 「佐佐木先生還暦記念祝賀会の記」藤田徳太郎『心の花』36-7 竹柏会 昭和7年7月28頁

59) 「小畑薫良氏を紹介す」花園兼定『英語青年』48-11(総号642) 研究社 大正12(1923)年3月1日



外務省の、今日も御列席の小畑薫良君<sup>59)</sup>は、長く米国英国にをられまして、既に倫敦に於いて、李白の集の訳を出版せられてをるのであります。(中略)自分が我が国の歌謡の中から最も勝れたと思ふのを選び、それに最も正確であると信ずる解釈を下しまして、小畑君のすぐれた翻訳を請ひ、すぐれた英訳の選集を出したいと思つてをります。」と述べた<sup>60)</sup>。小畑を佐佐木に紹介したのは外交官 市河彦太郎 (1896-1946)<sup>61)</sup>であった。市河彦太郎は初めは日本文化を外国人に伝えることを重視してはいなかったが、次第にその必要性を感じるようになっていた。「一九二七年に米国に往つたときは全然事情を異にしてみた。」「その頃は外交に於ける文化宣伝の重要性について相当はつきりした認識を持つてみた。そして手あたり次第に日本文学の英訳を買つてはアメリカの友人に送つた」(『文化と外交』市河彦太郎 岡倉書房 昭和14年「外国に知られてゐる日本文学」18頁)。

既に国際関係は厳しい状態にあったが、昭和7年12月25日佐佐木と市河彦太郎は、砧村の小畑薫良の新居を訪ね歓を尽くした。佐佐木は「李太白去りリツトル(ン)来る」と詠んだ<sup>62)</sup>。同じ頃、昭和7年12月28日財団法人日本学術振興会が設立<sup>63)</sup>された。現在の独立行政法人日本学術振興会の前身であり、『学術振興』7 昭和13年3月に掲載された「長鳴鳥」(和田三造考案)のシンボルマークはデザインを改修し現在も使用されている<sup>64)</sup>。

昭和6年東北帝国大学教授(美学)阿部次郎は「過去七年間に亘る徳川芸術考察の筆を、茲に抛つ」(『徳川時代の芸術と社会』改造社 昭和6年 617頁)と記した。当時学生として阿部に接していた古川久<sup>65)</sup> (1909-1994)が今後の研究対象について尋ねたところ阿部は「古代それも仏教渡来以前のものに興味を覚えつつあり」「万葉もしくは記紀歌謡などを問題にしたい」と答えた<sup>66)</sup>という。『世界文化と日本文化』阿部次郎 文芸評論 第2輯 岩波書店 昭和9年「序」には「本書の内容をなす八つの文章は、最後の三つを除けば、遁辞を構へることを許さぬ私自身の学術的領域に接するものである。」(1頁)とするが、その三つとは「日本の詩歌」「世界文学と万葉集」「万葉集の世界」である。阿部は万葉集については自分は「素人」とであると強調する。

私はこの課題に答へるために、身分相応に内容を限定する。(中略)この方面からならば、私にも素人考を述べる準備がないこともないやうに思ふ。

「日本の詩歌」519頁 初出：『短歌研究』2-1 昭和8年1月  
私は寧ろ万葉集の独自の価値に就いて、門外漢としての一面観を語つて見たいと思ふ。これも固より門外漢の一面観である。(中略)私は素人の一面観を以て、断片的ながらにこれ等の問題を一瞥して見ようと見ふのみである。

「世界文学と万葉集」545-546頁 初出：『万葉集講座』5 昭和8年9月

60) 「謝辞」佐佐木信綱『心の花』36-7 竹柏会 昭和7年7月 17-18頁

61) 「市河彦太郎君」佐佐木信綱『心の花』50-5 竹柏会 昭和21年5月 8頁 ※追悼文

62) 「秋砧荘の集い」小畑薫良『心の花』68-4 竹柏会 昭和39年4月・「日記の中より」佐佐木信綱『心の花』37-2 竹柏会 昭和8年2月「秋砧村荘の歌」4頁

63) 『日本学術振興会年報』1 自昭和七年十二月至昭和九年三月「設立経過」

64) 日本学術振興会 組織概要 <https://www.jsps.go.jp/j-organization/mission/>

65) 「阿部次郎の古典研究-3-」〔付阿部次郎逸文・阿部次郎研究参考文献リスト〕古川久『東京女子大学附属比較文化研究所紀要』25 1968年6月によれば「昭和四年春から同九年まで在仙」11頁。

66) 同7頁。当時は「今日では所謂万葉ばやりの世の中」「萬葉道」武田祐吉『國學院雑誌』39-2 (通号462) 國學院大學 昭和8年2月 1頁であった。

日本学術振興会万葉集英訳に委員として参加してからも「専門委員と称する専門の先生方の間に素人として加はり」（「万葉集の文化史的位罫」阿部次郎『万葉集について』（学生課叢書 第9編）京都帝国大学学生課編 岩波書店 昭和18年2頁）「私はたゞ素人の弱点のみを言つてそれで引き下る者ではない」「素人も何か学問の進歩に貢献することを許されぬ道理はない」（同3-4頁）と繰り返す。

山田孝雄（1873-1958）も、自分は万葉集の専門家ではないという。『万葉集講義』山田孝雄 巻第1 宝文館 昭和3年2月「自序」（昭和二年十一月二十三日）には「余元来歌人にあらず、又歌学者にあらず。万葉集に対しては知らずといふを当れりとす。」<sup>67)</sup>とある。この書は「自序」によれば、山本まち子の懇請により萩の家（落合直文）旧同人のために講義、中断後大正14年東北帝国大学において再開<sup>68)</sup>、その講案を清書したものにすぎない、という。『万葉集講義』巻第3 宝文館 昭和12年11月「序」（昭和十二年四月一日）によれば、東北大での講義は「昭和八年二月第四五〇番の歌を了へて後中止」、昭和8年9月山田は東北大学を退職する。高木市之助（1888-1974）は『万葉集講義』についての逸話を記している。

誰かが、先生の「万葉集講義」を礼賛して、その続刊を希望した際、先生は「あれは学問ではありませんよ。これから万葉の学問をしようとする人々のための基礎的な仕事を準備しただけのことですよ」と、まるでその人の蒙を啓くような態度で言つてのけられたことがある。（中略）先生のあの時の学問的良心が、その人の先生に対する偶像を先生自ら破壊することによつて彼に冷汗をかかせたことについて、さすがに先生だと胸のすく思いをしたことを思い出せばいい。

「山田孝雄先生」高木市之助『語文』8 日本大学国文学会 昭和35年5月 200頁

谷崎潤一郎が『源氏物語』現代語訳校閲依頼のため初めて山田孝雄の自宅を訪問したのは「翌〔昭和〕十年の春の末、仙台に桜が咲いてゐる頃」（「あの頃のこと（山田孝雄追悼）」昭和34年12月 472頁）<sup>69)</sup>「〔谷崎は〕和服姿に竹の皮の草履をはき、笠をかむり、杖をつい」（「古今五千載の一人山田孝雄先生」中山栄子 27頁）ていたという。その時の山田には「平田篤胤などに見るやうな国士の風があつた」が「戦争中、先生を以て極端な右翼の徒と同一に見、ひそかに非難する声も折々聞えた」<sup>70)</sup>（「あの頃のこと」473頁）。高木は戦時中文部省次官と面談する山田の印象を「その時感じた先生の学問から発散する権威といつたものを今も忘れることは出来ない。（中略）これなら大丈夫学問が政治

67) 『源氏物語の音楽』山田孝雄 宝文館 昭和9年 自序にも「音楽の技を知らず」「机上の空論」と記す。

68) 『古今五千載の一人』中山栄子 少林舎 昭和36年「古今五千載の一人山田孝雄先生」には「〔山田孝雄〕先生の『萬葉集』の講義に、同僚の阿部次郎教授が聴講されるという珍しい教場の風景がつづき」11頁とあるが、「序」山田忠雄は阿部が聴講したのは「連歌史概説」とする（4頁）。中山栄子（1901-2000）は日本大学高等師範部国語漢文科で山田の教えをうけ、卒業後東北大学に図書館職員として勤務、東北大学に赴任した山田から引き続き指導をうけた。『只野真葛』中山栄子 昭和11年・『むかしばなし 天明前後の江戸の思い出』只野真葛著 中山栄子校注 平凡社 1984年（東洋文庫433）参照。なお、山田は宮城県女子専門学校においても万葉集講義を行い（『宮城県女子専門学校校史』昭和61年 25頁）東北大学附属図書館所蔵『万葉集講義』911/321には宮城県女子専門学校校友会図書部の受入印がある。

69) 『谷崎潤一郎全集』23 中央公論新社 2017年3月。『偲ぶ草 ジャーナリスト六十年』雨宮庸蔵 中央公論社 1988年 343頁によれば昭和10年4月。「灰を寄せ集めるー山田孝雄と谷崎潤一郎訳「源氏物語」ー」西野厚志『近代文学における源氏物語』伊井春樹監修 千葉俊二編集（講座源氏物語研究6）おうふう 平成19年8月 131頁 は谷崎と山田のはじめての対面は5月26日か27日と推定。

を圧倒している」(「山田孝雄先生」高木市之助 200頁) ととらえた。

山田は、古典翻訳の必要性を認識していた。「古今五千載の一人山田孝雄先生」中山栄子 には山田から「源氏物語は世界文学史上に誇るべき大傑作であるが、あのままでは読む人も少く忘れられてしまうから、ぜひこれを現代語に訳しておかなければ滅びてしまう。(中略) 今度谷崎氏が訳してくれるというので、よい人を得たとよろこんで校閲を引受けたのである」(28頁) と聞いたとある。「山田博士面影十話」内海繁太郎『語文』8 日本大学国文学会 昭和35年5月 によれば谷崎から源氏物語校閲について相談があった時「源氏物語は音楽の書だから」(206頁) 谷崎の作品を読んで、どの程度音楽がわかるか確認をしたという。

昭和8年山田孝雄は日本学術振興会第二部常置委員会(哲学、史学、文学) 委員を委嘱<sup>71)</sup>された。阿部次郎の日記<sup>72)</sup>によれば、昭和9年1月11日「学術振興会より委員嘱託の書付届く」<sup>73)</sup>、昭和9年3月29日「上野の学士院会館の日本学術振興会第二部委員会に出席、鈴木(虎)<sup>74)</sup> 狩野(直) 羽田(亨) 金子(馬治) 等諸氏と初対面、本年前期の補助を決定し万葉集英訳小委員会委員に指名せらる」、昭和9年5月16日「万葉集小委員会招集状(二十四日)」昭和9年5月24日「一時半より学士会館にて万葉小委員会、主として姉崎さんと渡り合ふ計画大略決定」、昭和9年5月31日「山田(孝) さんを訪問万葉小委員会の話」といった流れになる。

『事業報告』昭和9年度後期 日本学術振興会学術部 昭和10年5月 には、「第17小委員会委員(日本古典翻訳)(9-4-9設置) 現在委員13名」(221頁) として委員長以外は氏名の五十音順に記されているが、これを就任年月順に並べ替え、専門・役割分担を追加<sup>75)</sup>して示す【表1】。

「英訳万葉集ニ就テ」市河三喜(注75) には事業の経過が整理されている。英訳の担当は昭和10年4月に小畑薫良(外務省嘱託) と石井雄之助(白村)(埼玉県粕壁中学校教諭) の二名<sup>76)</sup> に嘱託した。小畑については李白の詩の英訳、石井は自作の英詩集が評価された。

第一回委員会について「萬葉集の英訳」『英語青年』71-7(総号915)<sup>77)</sup> 昭和9年7月1日 通頁248 に「日

70) 山田は『日本文化と日本精神』(国民自覚叢書 第6編) 山田孝雄 日本文化中央聯盟 昭和14年「外國文化攝取の必要」で外国文化の攝取を食物に例えて説明しているが、「【日本語学者列伝】山田孝雄(二)」佐藤喜代治(1912-2003)『日本語学』3-1 明治書院 昭和59年1月99頁・『訥言録』佐藤喜代治 昭和52年 95頁によれば山田は国語学専攻の新入生に洋食を馳走した。一方、澤瀉久孝(1890-1968) は玄米食を推奨した『玄米の味 日本的感覚への思慕』澤瀉久孝 新日本図書 昭和21年「玄米の味」「萬葉人の健康と食物」。

71) 『山田孝雄年譜』山田忠雄・山田英雄・山田俊雄編 宝文館 昭和34年によれば、昭和8年3月17日。『昭和12年度 事業報告』日本学術振興会学術部 284頁 によれば、任期は昭和8年1月-12月末日。

72) 『阿部次郎全集』15(日記 下) 角川書店 昭和38年4月による

73) 『昭和12年度 事業報告』日本学術振興会学術部 284頁 によれば、任期は昭和9年1月-11年1月末日。

74) 引用者注：筑波大学附属図書館中央図書館所蔵 鈴木虎雄関係史料に「学術部第二常置委員会委員委嘱状」1-140-1・「学術部第十七小委員会委員委嘱状」1-140-2がある(筑波大学附属図書館OPACによる)。

75) 「英訳万葉集ニ就テ」市河三喜(委員総会研究報告講演集 第3) 日本学術振興会学術部編 日本学術振興会 昭和13年1月 31-32頁

76) 東北大学附属図書館蔵晩翠文庫(土井晩翠旧蔵書) には、小畑の訳詩集 *The works of Li Po* と石井の英詩集 *An Eastern voice* があり、ともに著者から贈られたとの書き込みがある。『雨の降る日は天気が悪い』土井晩翠 大雄閣 昭和9年「苦熱の囂」(一九二三) に「追記李白詩選は早稲田大学出身、小畑薫良君がアメリカ留学中に韻文訳したもの、内ヶ崎〔作三郎〕代議士と共に外務省の情報局を訪ふた折、偶然初めて小畑君に逢つた、君は漢学の家庭に生れ、少時から漢詩を愛誦したさうだ、李白詩選は数千部を刊行したと聞いて驚いた。」15-16頁 とある。

委員長	帝国学士院会員 東京帝国大学名誉教授	文学博士	瀧 精一	9年4月	文化史
	帝国学士院会員 東京帝国大学名誉教授	文学博士	姉崎 正治	9年4月	文化史
	東北帝国大学教授		阿部 次郎	9年4月	文化史
	京都帝国大学教授	文学博士	鈴木 虎雄	9年4月	漢文学
	帝国学士院会員 東京帝国大学教授	文学博士	辻 善之助	9年4月	国史
	東京帝国大学教授	文学博士	市河 三喜	9年5月	英文学
	帝国学士院会員	文学博士	佐佐木信綱	9年5月	国文学・国文口語訳原案起草委員（歌人）
	帝国学士院会員 京都帝国大学教授	文学博士	新村 出	9年5月	文化史
	青山脳病院長	医学博士	斎藤 茂吉	9年11月	国文口語訳原案起草委員（歌人）
	國學院大学教授	文学博士	武田 祐吉	9年11月	国文口語訳原案起草委員
	東京帝国大学教授	文学博士	橋本 進吉	9年11月	国文口語訳原案起草委員
	国宝保存会委員 日本大学文学部講師	文学博士	山田 孝雄	9年11月	国文口語訳原案起草委員
	京都帝国大学教授	文学博士	吉澤 義則	9年11月	国文口語訳原案起草委員

【表1】第17小委員会委員（日本古典翻訳）

本古典に理解ある外国人を選び」とあるので、この段階ではホジソンの参加は確定していなかったと思われる。また「各委員により約千首をえらび、九月下旬の第二回委員会にもちより抄訳すべき短歌、長歌を選定」という予定を示している。千首の選出過程については「各委員選択歌数表」<sup>78)</sup>がある。この資料の「甲 各委員の選択歌数及び歌体別（五十音順）」には、瀧委員長を除く7委員の選択歌の数が、各巻歌体（長歌・短歌・旋頭歌）別に示されている。次に各委員の合計部分のみを書き出す。

- 姉崎委員 合計 一七九四首（長二〇一、短一五九七、旋一四、）
- 阿部委員 合計 一〇〇〇首（長一二五、短八六二、旋一三、）
- 市河委員 合計 一〇〇七首（長二五八、短七三八、旋一一、）
- 佐佐木委員 合計 一〇二六首（長一三八、短八六七、旋二一、）
- 新村委員 合計 一五二九首（長一七七、短一三二七、旋二五、）
- 鈴木委員 合計 一〇三四首（長二二〇、短八〇二、旋一二、）
- 辻委員 合計 一〇〇一首（長一七九、短八一四、旋八、）

この結果を整理した「乙 各委員の選択歌数より見たる巻別選歌表」から、全体の集計部分のみを書き出すと、(A) 一委員の選によるもの一〇五二首 (B) 二委員の選によるもの六七九首 (C) 三委員の選によるもの四三三首 (D) 四委員の選によるもの二七六首 (E) 五委員の選によるもの

77) この号裏表紙に国際連盟脱退演説（松岡洋右）レコードの広告がある。

78) 富山市立図書館所蔵山田孝雄文庫 [英譯萬葉集関係資料] [8] 各委員選択歌数表 [日本学術振興会古典翻訳委員会] [1938] 911.129/エ/8



の二一五首 (F) 六委員の選によるもの一七四首 (G) 七委員の選によるもの一八〇首、と記されている。末尾の「備考」には「四委員以上の合選のものを合計すれば八四三〔ペンで「三」を「五」に修正〕首、三委員以上の合選のものを合計すれば一二七六〔ペンで「六」を「八」に修正〕首となる。」とあり、このあたりを目安として、千首を絞り込んでいったようである。この資料は、誰がどの歌を選択したのかは分からないようになっている。基本的には推薦者の数を根拠としているので、個人の影響が抑えられる。しかし、さらに11月に委嘱された口語訳原案起草委員によっても再検討が行われている(続稿に述べる)。

姉崎は昭和9年6月から10月の間海外渡航中であった(『たびまくら』第6集 姉崎正治 昭和14年「外国航路回顧」)。「外国航路回顧」冒頭には「初めて外国に旅出せしより恰も四十年、今回の行にて外国航海四十回に及ぶ」と記す。『たびまくら』第1集 姉崎正治 昭和9年11月「雲波詠草(二)」はこの昭和9年の歌日記であるが、「半日万葉集をよむ」(七月)十三日・「万葉集第二十巻をよむ」(九月)二十七日といった記述が見られる。鈴木虎雄(1878-1963)は漢文学が専門だが、漢学者桂〔湖村〕に和歌の詠作も習った。歌集『葯房主人歌草』があり、その序に「歌集をよみあさりしが、家隆の集、「金槐集」などの外心うちしはいと稀なり。「万葉集」をよみ初めしより、始めて漢詩などにはあらぬものここに在ることと悟りぬ。」とある。また漢詩でも恋愛詩を好んだという<sup>79)</sup>。阿部の場合、斎藤茂吉日記昭和9年5月25日に「帝国文化学会デ万葉集ノ英訳ヲ企テタルニヨリ、先ヅ一千首ヲ選ブコトナシ。阿部氏ノ分ハツマリ僕ガスルコト、ナツタワケデアル。コレハ阿部氏が個人トシテ友人ノ僕ニ依頼シタワケデアル。」との記述<sup>80)</sup>があり委員以外の意見が入ることもあった。

口語訳原案起草委員の分担は抽選で決め、巻一・二は山田、三・四は吉澤、五～七は佐佐木、八～十一は斎藤、十二～十六は武田、十八～二十は橋本が担当することとなった<sup>81)</sup>。

斎藤茂吉日記昭和10年5月27日「午後三時ニ外務省情報課ノ小幡【マ】氏ニアヒ、万葉英訳ノ相談ヲナス」、5月28日「午後三時スギニ小幡【マ】氏ニアヒ、万葉英訳ノ相談ヲナス。巻八ノ大体終了ス」とあり、翻訳者と直接相談をしている。

『東京朝日新聞』昭和10年2月23日に「英訳万葉集 最高級の研究者を総動員 世界にほこる」の見出しの記事が掲載され、翻訳者は「小畑薫良氏他一名」ホジソンは「最後の仕上げ」を行うとある。『読売新聞』昭和10年2月25日には「万葉集英訳に無名の一学究 選ばれて晴の大事業」の見出しで「英訳者二名のうち外務省情報部嘱託小畑薫良氏を選定したが残りの一名に無名の一学究一埼玉県粕壁中学の英語の先生が選ばれた、号を白村といふ石井雄之助氏がそれで」と書かれている。ホジソンは石井雄之助(白村)の英詩を評価していた。

79) 『葯房主人歌草』鈴木葯房(あけび叢書 第19篇)アミコ出版社 昭和31年・『玉台新詠集』上巻 徐陵編 鈴木虎雄訳解(岩波文庫)岩波書店 昭和28年 序文13-19頁・「先學を語る 鈴木虎雄博士」『東方學』52 東方學會 昭和51年7月 145頁・158頁・161頁 参照

80) 『斎藤茂吉 あかあかと一本の道とほりたり』品田悦一(ミネルヴァ日本評伝選)ミネルヴァ書房 2010年 238頁 参照

81) 『万葉清話』佐佐木信綱 靖文社 昭和17年「英訳萬葉集に就いて」57頁。口語訳草稿は鈴鹿市佐佐木信綱記念館に現存し、その詳細については「日本學術振興會『英訳萬葉集』(一九四〇)の〈和文草稿〉をめぐる考察」河路由佳『戦争と萬葉集』5 戦争と萬葉集研究会 2023年2月に記述と分析がある。

〔約二年前仙台でホジソンに〕僕は又石井白村氏の英詩について話した。——私はあなた方イギリス人が Yone Noguchi 氏の詩を読むとき (中略) Yone Noguchi といふ東洋詩人の提供する exoticism をも賞美するのではないであらうか。あなたは石井白村氏の英詩の中にもさういふ element を発見し、それに influence されて、石井氏の詩に同感してゐるのではないであらうか。と僕はまづい英語で言つた。彼は答へて、「否、否、然らず。石井氏の詩は真個によき詩なり。」僕曰く「あなたは石井氏の詩を英国人の詩に対するとひとしき態度を以て讀みて尚且賞玩しうるや。」彼曰く「然り。」

「ホヂスン再来」R.F.生〔福原麟太郎〕

『英語青年』60-4 (総号779) 研究社 昭和3年11月15日 20頁 (通頁140)

「日本人の欧文文学」岡倉由三郎『岩波講座世界文学』11 岩波書店 昭和8年4月「第五 日本人の英詩」にも石井は取り上げられている。「石井白村は (中略) 立派な英詩を作つて居た。(中略) 一九二〇年代に其の英詩集 “Twelve Poems” を出して、詩才を詩人 Blunden に認められた。其後一九二七年に “An Eastern Voice” を出し、よく洗練された詩を取めて居る。氏の諸作は本格的な押韻の詩で、而も其の用語は極めて平易で内容にふさはしく、美にして可憐の感を与えるものが多い」(32頁)。片々録「英訳万葉集」『英語青年』73-1 (総号933) 昭和10年4月1日 32頁 は英訳事業の概容を記し、石井白村についてやや詳しく紹介している。「石井氏は本誌に時々其作品を發表して土居、ホヂスン、ブランデンの諸氏にその天分を認められた若き英詩人である」「石井白村氏が市河博士の推薦で英訳者の一人に選ばれるや、新聞紙は無名の一学徒<sup>82)</sup> 登場と書き立てて居る。(中略) 横浜でベルンスタインといふ独逸人の義侠的世話を受けその人の斡旋で知つた当時東大講師エドモンド・ブランデン氏に自作の英詩を見せた所、同氏は氏のその将来を囑望し指導を引受け東京のブ氏の自宅に通つて指導を受けた」とある。『英詩韻律法概説』石井白村 篠崎書林 昭和39年「はしがき」に「かつてブランデン先生 (Professor Edmund Blunden) 第1次訪日の間、(中略) 机の面をたたいて英詩のリズムを教えていただいた。」と記す。「万葉集の浦島物語英訳」石井白村『英語青年』72-1 (総号921) 研究社 昭和9年10月1日 28-29頁 と学術振興会訳『英訳万葉集』の、冒頭部分を示す。

The spring sun shines behind the haze  
And misty are the brooding rays  
Upon the shore of Sumi Bay  
And on the waters far away. 【英語青年掲載石井訳】

When, in spring, the sun is misted,  
And going out on Suminoe's shore

【学術振興会訳】

春日之 霞時爾 墨吉之 岸爾出居而【万葉集 卷九 1740 詠水江浦島子】<sup>83)</sup>

福原麟太郎はブランデンとホジソンの詩を対比し「Blunden 氏の多くの詩は全体的にホヂスン氏と比較して緩やかな調子に間伸びがある。そのかはり、いつも jade のやうに硬くきらきらしてゐるホヂスン氏にはない一種のなごやかな白光がブランデン氏の作を艶々しく飾つてゐる。」「東

82) 引用者注：『日本英文学会五十年小史』昭和53年「【座談会】日本英文学会五十年の歩み」19頁によると、日本英文学会会員は、昭和9年の会員1190名中、中等学校在勤者が337名で最も多かつた。大学及び大学予科在勤者は109名。また「〔そのころ〕東大の卒業生はたいがい中学校の教員になつた」(齋藤勇の発言) という。「萬葉集を英譯する一教師 (石井白村氏)」『雄弁』26-7 大日本雄弁会講談社 1935年7月にも石井の紹介がある。また『市河三喜伝 英語に生きた男の出自、経歴、業績、人生』神山孝夫 320-321頁参照。

83) 以下万葉集原文は『白文万葉集』上巻・下巻 佐佐木信綱編 岩波文庫 岩波書店 昭和5年による。

京の詩 (Blunden氏の *English Poems* から) 福原麟太郎『英語青年』58-5 (総号756) 研究社 昭和2年12月1日通頁149 とするが、ここに指摘されているホジソンの引き締まった調子が、学術振興会訳にも反映しているのではないか。石井白村は斎藤茂吉<sup>84)</sup> の「死にたまふ母」の英訳を発表している<sup>85)</sup> がこれもホジソンに見てもらったものという。

新聞記事には「ピアソン (Jan Lodewijk Pierson, Jr. 1893-) 氏の如きは学術振興会に本計画のあるのを知つて態々一委員の許へ参加方を申込み共同労作を熱望して来た程だつた」「だが真に日本文化の真髓を海外に紹介する為には日本人の心理で、日本人的の解釈で…といふので、委員は全部国内に求められた」「英訳万葉集 最高級の研究者を総動員 世界にほこる」『東京朝日新聞』昭和10年2月23日 とある。 *The Manyōsū translated and annotated by J.L. Pierson, Jr book IV Leyden: E.J. Brill, 1936* 序文に関連記述があり藤田徳太郎<sup>86)</sup> (1901-1945) が紹介した。

〔ピアソンを訪問した久松潜一によると〕ピアソン氏は、この苦心の業績なる、訳註万葉集が、日本の学界においては、余り多くの反響をもたらさないやうに思はれる事に対し、失望してゐた所、橋本進吉博士から、此の書に対する、長文の音信を得られたので、甚だ喜んでゐたといふ話である。(中略)

(ピアソン序文の翻訳引用前略) 瀧教授は、私に、次の如く、確言した。此の委員会は、決して、語学上の意向を有してゐるのではないと。それゆゑ、私は、同じ方向に、私の仕事を進めて行つたとしても、我々の目的は全く違つてゐると、評価せられるべきである。(序文翻訳以下略)

〔【原文】Prof. TAKI assured me that the committee has no linguistic aspirations, so that it would be appreciated if I went on with my work in the same way, our aims being totally different.〕

此の序文の言によつて、本書の意図は明かで、日本学術振興会の英訳万葉集の如きは、万葉集を外国人の間に、普及せしむる事を目的としてゐるが、ピアソン氏の目的は、あくまでも、語学的立場に依存してゐるのである。

「ピアソン氏の「訳註万葉集」に就て」藤田徳太郎『日本短歌』5-6 日本短歌社 昭和11年6月 10-12頁

久松潜一 (1894-1976) は渡欧中<sup>87)</sup> の昭和10年、西欧の日本文学研究者を訪ねるなかで、ピアソンに面会した。「万葉集第五巻を完成するために、今一度日本にゆきたいと言つて居られた」という (『西欧に於ける日本文学』久松潜一 至文堂 昭和12年「西欧に於ける日本研究に就いて」14頁 初出:『中央公論』昭和11年6月 助力者下位〔春吉〕は日本に帰国)<sup>88)</sup>。久松はフロレンツにも面会した。フロレンツも日本の最新の研究成果入手が困難になり「博士は万葉集の二十巻の註釈をかいて居られて、死ぬまでに刊行したいが、或は原稿を弟子にわたして完成をゆだねるかも知れないと言はれた」

84) 斎藤茂吉日記 昭和11年4月23日「石井白村ニ「あらたま」ヲ小包ニテオクツタ。」

85) 「斎藤茂吉作「死にたまふ母」英訳」石井白村『英語青年』81-5 (総号1033) 研究社 昭和14年6月14日～81-8 (総号1036) 研究社 昭和14年7月15日に連載。81-5掲載分に注記があり、ホジソンがこれを見たとあり (14頁)、またホジソンの短評がある (13頁)。

86) 『橘曙覧』藤田徳太郎 不二歌道会 1960年「著者略歴」226頁「著書目録」117頁参照

87) 昭和10年4月4日神戸出帆、昭和11年4月16日帰国。引用書序文及び162頁参照。

88) ピアソンの *The Manyōsū book IV* (1936) 序文 (1935年8月) に After the translation of Book-IV, my friend and guide Prof. H. SIMOI returned to his own country, leaving me behind in a hopeless state. The only way-out is to follow him to Japan and claim his help and great knowledge for each following Book. とある。「下位春吉とイタリア＝ファシズム - ダンヌンツィオ、ムッソリーニ、日本」藤岡寛己『福岡国際大学紀要』25 2011年3月 58頁 によれば下位が日本に帰国したのは1933年5月。下位自身は「伊国に紹介されたる日本文学」下位春吉『書祭 書物展望第百号記念文献資料集 人』書物展望社 昭和15年5月 に「予は日本文学を紹介するには、記紀万葉古今の古いところから初めるよりも、近代の方からやらねばならぬものと信じてゐる」22頁。

(同「フロレンツ博士と日本古典文學」79頁 初出：『明日香』昭和11年9月)。ピアソンの英文万葉集第五卷はフロレンツとの共著として刊行され献辞にはAdolf Hitlerの名が記された<sup>89)</sup>。

東北大学附属図書館のピアソン *The Manyōsū* 所蔵状況は、I・II・IIIは昭和9年3月17日受入(購入・登録番号：洋甲93969・93970・93971)、IVは昭和12年3月1日受入(登録番号：洋甲106929)、Vは昭和13年12月14日受入(登録番号：洋甲115910)である。本稿執筆にあたり現物を確認したが、Vは頁の切られていない部分が少なくなく、丁寧には読まれなかったようである。なお、ホジソンは昭和13年7月に日本を去って帰国している。

昭和10年3月1日(消印10.3.2) 新村出宛佐佐木信綱書簡に「先日石井氏仙台にゆかれ種々話を聞て帰られ候との事 小畑君も近く同地へ行て面談したし云々とかたりをられ候<sup>90)</sup>とある。小畑薫良は「市河博士に連れられて、石井氏と共に私が初めて春尚浅き仙台にホヂソン氏を訪ふたのは三年半前のことである。」(「レーフ・ホヂソン氏と英訳万葉集」小畑薫良『心の花』42-9 竹柏会 1938年9月 5頁)と回想する。市河はその5月25日の座談会で、万葉集英訳の困難を語る。

**市河** いま万葉集〔外国語訳〕をやつてるんですけども、困つてゐます。

**末弘** 国際文化協会でやつてるんですか。

**市河** 学術振興会でやつてるんですが、まア厳格な意味に於ては不可能でせう。

(中略)

**市河** 枕言葉、かゝり言葉、あゝいふものは殆ど訳せませんね、ところが、あゝいふものを取つちま

つちや極く僅かになつちまふんですね、内容的にいつてほんの一語で済んでしまふ、さうかといつて余計なことを加へるわけにはゆかないし。英語をあまり正確にしようと思はないで文法は少し位違つても、少し新しい言葉だつたらどうかと思ひますが、さういふわけにはゆかないんですかね。

**谷崎** 英語をあまり正確にしようと思はないで文法は少し位違つても、少し新しい言葉だつたらどうかと思ひますが、さういふわけにはゆかないんですかね。

「文章を語る夕」【座談会】茅野蕭々 後藤末雄 市河三喜 末弘巖太郎 辰野隆 谷崎潤一郎 (五月二十五日 星ヶ岡茶寮にて)・『経済往来』10-7 1935年7月 285頁『谷崎潤一郎対談集 文藝編』小谷野敦 細江光編 中央公論新社 2015年所収・『英語青年』73-12 (総号944) 昭和10 (1935) 年9月15日 片々録 33頁 に抄録

**市河** 万葉集の訳をするのに、古いものですから、何時頃の英語を使ふかといふことで、まづ三百年位前の、バイブルの翻訳に使つたもの、それを真似たらどうかといふ考へでやり始めたんですが、それから仙台に行きまして、翻訳の仕上げを見て貰ふんで、ホヂソンといふ先生に話をした。いけないといふんですね。バイブルのものは、いゝ影響を与へてゐるけれども、今の人には悪いといふ、バイブルの英語を使はれると日曜くさくといふんですね。

(中略)

**末弘** 「サンデイスメル」こいつ面白い。いいことを聞いた。

**市河** 現代人に一番易しいものを使つてくれといふんですね。

**辰野** それがクラシズムなんですね。

**市河** それを使へば一番間違がないと思ふといふんですね。

(中略)

**末弘** 結局は最大公約数みたいな言葉が一番いゝわけなんだろうが、それはなか〜難しいね。

**辰野** さういふものを選択するのは難しいね。

**市河** ホヂソン自身もさういつてみました。どうしても適当な言葉が出て来ない時は、詩を作るのをやめてビリヤードに行つてしまふ、さうしてビリヤードでもやつてみると、ハツと思出す、それから始めるといふやうにする。

**末弘** さういふものは総て一度エスペラントに訳して、それから各外国語に直すことにすればよくなる。(以下略) 同上288頁

89) 『カール・フロレンツの日本研究』佐藤マサ子 春秋社 1995年 271頁 - 「日本とドイツにおけるカール・フロレンツの経歴と状況」馬場大介 『人文学報 ドイツ語圏文化論』516-14 2020年3月 参照

90) 『佐新書簡 新村出宛佐佐木信綱書簡』林大翻字 北川英昭翻字・修補 佐佐木朋子編 竹柏会 心の花 2019年



「三百年位前の、バイブルの翻訳に使つたもの」とは欽定英訳聖書<sup>91)</sup>のことであろう。そうした古典的な翻訳をホジソンは認めなかった。このことで、学術振興会訳の方向性は大きく変わったと思われる。完成した英訳について、齋藤勇<sup>92)</sup>はいわゆる詩語を避けた訳であるのがホジソンらしいとしている。ホジソン自身の詩も「ロマンチック詩人のイメージや詩語を用いることを避け、言葉はすべて彼の友人仲間、犬や家畜の飼育者、船乗りや田舎人やロンドン庶民の口語から選び、それを磨き上げ」「仙台におけるラーフ・ホジソン」土居光知『英語青年』109-1(総号1367)昭和38年1月1日19頁 たものであったといい、同じ姿勢が貫かれたものと思われる。

なお、英訳万葉集の英文については、小花清泉(貞三1871-1942)<sup>93)</sup>、Harold Frederick Woodsworth<sup>94)</sup>(1883-1939)らも検討に加わっており、委員が私的に相談するなど、実際には少なからぬ人々が協力したものと思われる。 【以下続稿】

【謝辞】貴重な資料の閲覧・掲載を御許可いただいた 新村出記念財団(重山文庫)富山市立図書館(山田孝雄文庫)に深く感謝申し上げます。

【前稿修正】「東北大学所蔵Ralph Hodgson関係資料とその周辺(二)」大原理恵『東北大学史料館研究報告』18 2023年3月24頁13行 誤:新星】であった。⇒正:新星であった。

91) 『谷崎潤一郎対談集 文藝編』注97参照。「現代英語に及ぼした聖書の影響」市河三喜『英文学研究』15-1 日本英文学会 1935年 「1611年の欽定英訳聖書(Authorized Version)が文学上の一大傑作として英文学史上に重要な地位を占めて居ることは何人も認める処であり、その文体は簡素にして威厳あり、力強く且韻律的である。」21頁 とある。

92) 「『万葉集』のように古い詩を訳すにも、‘damsel’や‘maid’のような、いわゆる詩語を用いずに、万代にわたって韻文にも散文にも用いられる‘girl’を選び採るような方針であったそうだ。』『蔵書閑談』齋藤勇 研究社出版 1983年「在日十年余のホジソン」347頁(初出:「ここかしこ」『英文学研究』18 3 1938年7月)。ただ「此岳爾 菜採須兒」(万葉集 卷一 1) Maiden, picking herbs on this hill-side, といった例はある。ピアソン訳ではO girl picking (gathering) herbs on this hill, である。

93) 「清泉小花貞三君」佐佐木信綱『心の花』46-3 竹柏会 昭和17年3月「英訳万葉集の事業が日本学術振興会によつてはじめられた時、会の方にいひ、会から訳語の妥当か否かに就いて検べることを、小花さんに囑托した。」小花清泉君追悼集 15頁

94) 「『ウツワース博士追憶集』刊行記」壽岳文章『日本古書通信』18-15 昭和28年10月15日「学術振興会の(英訳万葉集)の校正が出た時には、新村先生の希望で、文学愛好者としての立場から訳詞に検討を加えるなど」7頁「<研究ノート>約束の書物が語ること『ハロルド・フレデリック・ウツワース博士追憶集』森田由利子『Ex 言語文化論集』11 2019年3月 参照。